

プログラム

(1) コーディネーター 研究部長 樋口 敏宏

(2) シンポジウム (6題, 各15分)

13:00～13:15

・サルコペニアに対する運動実践プログラムとフィードバックシステムの構築

〔医学教育研究センター 医療情報学ユニット〕 講師 渡邊 康晴

13:15～13:30

・慢性呼吸器疾患（気管支喘息，慢性閉塞性肺疾患，特発性間質性肺炎）に対する鍼灸治療の臨床効果に関する研究

—統合医療の臨床研究フィールド確立の一環として—

〔医学教育研究センター 内科学ユニット〕 教授 苗村 建慈

13:30～13:45

・地域貢献を目標としたチーム形成と活動内容・範囲・程度の評価

〔医学教育研究センター 眼科学ユニット〕 教授 山田 潤

13:45～14:00

・地域に根ざした健康予防（治未病）・医療拠点の大学となる試みと実働

〔鍼灸学部 基礎鍼灸学ユニット〕 准教授 和辻 直

14:00～14:15

・高校生のスポーツ障害発生とコンディショニング方法に関する調査

〔明治国際医療大学「スポーツ医療講座」〕 講師 神内 伸晃

14:15～14:30

・要介護を防ぐ独居高齢者の介護予防プログラムの検討

〔看護学部 成人・老年看護学講座〕 助教 西川 秋子

□総合討論

14:30～15:00

サルコペニアに対する運動実践プログラムと フィードバックシステムの構築

渡邊 康晴¹⁾, 木村 啓作²⁾, 梅田 雅宏¹⁾
河合 裕子¹⁾, 村瀬 智一³⁾, 樋口 敏宏³⁾

¹⁾ 医療情報学, ²⁾ 保健・老年鍼灸学, ³⁾ 脳神経外科学

加齢による筋力の衰え, いわゆる「サルコペニア」はQOLの低下や寝たきりなどの問題を引き起こす。この予防にはレジスタンストレーニング(RT)とバランストレーニング(BT)が有効である。そこで本研究では, 運動によるサルコペニア予防を通して, 高齢者が多い南丹地域に貢献することを目指す。具体的には, 歩行機能の維持・改善と転倒予防に焦点を当て, 下肢を対象とした集中トレーニングを実施する。腸腰筋, 大腿四頭筋, ハムストリング, 前脛骨筋に重点をおき, 週2回, 3ヶ月のトレーニングを行わせる。高齢者が自宅で安全に実施できる点を考慮し, RTにはゴムバンド, BTには開眼片足立ちと balan ディスクを使用する運動プログラムとした。評価系として身長, 体重, BMIの他, マスキュレーターを用いた筋力測定, 開眼片足立ちテスト, MRIによる脂肪量および筋量の解析を行う。

現在, 本学学生を対象とした予備実験が進行しており, 最適な運動プログラムの模索段階にある。

慢性呼吸器疾患（気管支喘息, 慢性閉塞性肺疾患, 特発性間質性肺炎）に対する鍼灸治療の臨床効果に関する研究 —統合医療の臨床研究フィールド確立の一環として—

苗村 建慈

(共同研究者: 福田 晋平, 江川 雅人)

(目的)

- 1) 社会の高齢化により増加している, 慢性呼吸器疾患に対する鍼灸治療の臨床研究を進め, 鍼灸治療を現代医学の標準的治療と併用し, 補完医療としてどのような効果があるか, 研究を進めていくことが, 高齢化社会の地域医療に貢献するものと考えられる。現代医学の診療に鍼灸治療を併用した統合医療の場として, 臨床研究のフィールドを, 附属病院と鍼灸センターを中心として確立していくことが, 地域医療に寄与し, 補完医療として鍼灸治療を研究していくために, 必要と考えられる。
- 2) これらの臨床研究を通して, 内科疾患に対する補完医療としての鍼灸治療を実践できる人材を養成する。教員, 研究者の養成とともに, 統合医療を実践できる鍼灸師の教育にも寄与するものと考えられる。

(研究の概要)

1. 気管支喘息について, 喘息の重症度をプライマリー・エンドポイントとし, 喘息の病態である気道過敏性の亢進, 気管支喘息の病因である気道炎症が, 鍼灸治療により改善するかを検討する。
2. COPDの主症状の呼吸困難と運動耐容能の改善をプライマリー・エンドポイントとし, 全身性の慢性炎症を示すバイオマーカーについて, 鍼灸治療の効果を検討する。
3. 特発性間質性肺炎について, COPDと同様, 呼吸困難感, 運動耐容能の改善をプライマリー・エンドポイントとし, 間質性肺炎の活動性を示すバイオマーカーについて, 鍼灸治療の効果を検討する。

地域貢献を目標としたチーム形成と活動内容・範囲・程度の評価

眼科 山田 潤

地域貢献は大学に求められており、国家的な支援も始まった。本学でも重要な位置づけである。1) 地域に貢献でき2) 地域住民に分かりやすい内容で3) 論文などの研究成果に結びつき4) 大学や附属病院の発展に貢献出来る、4点を満たす課題の創出を試み、本発表を通じて学長から一般職員までの期待度が高い研究を今後発展させる。提唱案を列記する。

A) 中高齢者の健康維持を目的としたアンチエイジング活動：大学附属病院が京都府下で初めての抗加齢医学会認定施設であることを前面に押し出し、a) 足首関節計測計を用いた転倒予防に関する啓蒙活動とスポーツリハビリ効果を提供する。b) アンチエイジング食などを用いた健康管理教育を行い、地域コミュニティの活性化を試みる。c) 加齢に伴う眼疾患の早期発見と予防を地域に広める。d) アンチエイジング外来を通じて各診療科を活性化する。

B) 保育施設の作成により地域への貢献と、女性職員の勤務状況改善を試みる。

南丹市市民福祉部保健医療課との議論も加味して、このたたき台を遂行しようとする活気ある研究代表者を検索中である。

地域に根ざした健康予防（治未病）・医療拠点の 大学となる試みと実働 —附属鍼灸センターと病院との連携の調査—

和辻 直¹⁾、関 真亮¹⁾、日野 ころろ¹⁾、
篠原 昭二¹⁾、神山 順²⁾、糸井 啓純²⁾

¹⁾ 基礎鍼灸学講座、²⁾ 外科学講座

【はじめに】

日本は急速な高齢化に伴い、国民は健康に対する関心が高まっている。本学では、このニーズに応えられる地域に根ざした健康予防（治未病）・医療拠点となるためのシステム作りが必要となっている。これまで附属鍼灸センターと病院は連携されてきた。今後、この連携がより有機的に連携し、地域に根ざした施設となるためには活用状況を把握し、来院患者の考えを把握するための調査が必要である。その一つの試みとして附属鍼灸センターの患者を対象に、附属病院との併用状況を調査することにした。

【方法】

調査手順は、1) 本研究の主旨にあった調査票を独自に作成した。2) 本研究の主旨を理解した調査員が、附属鍼灸センターの来院患者さんに本調査の目的や主旨を説明して、本調査の同意を得た患者さんに待合室にてアンケート調査票を答えてもらう。

【結果】

調査票は、附属鍼灸センターの来院の切欠や来院の選択理由、センター来院時の併用する施設、来院の交通手段、病院の併設の良さなどを尋ねるように作成した。なお調査の実施はこれからである。

高校生におけるスポーツ障害発生と コンディショニング方法に関する調査

神内 伸晃¹⁾, 泉 晶子¹⁾, 木村 啓作²⁾, 吉田 行宏²⁾, 岩井 直躬³⁾

明治国際医療大学 ¹⁾保健医療学部, ²⁾鍼灸学部, ³⁾医学教育研究センター

我々は2年前より高大連携の一環としてスポーツクラブに所属する高校生を対象としたスポーツ外傷予防のための講義と実技を「スポーツ医療講座」と題して行ってきた。本学が行うスポーツ医療講座の意義や今後のさらなる充実に向けて、対象となる高校生のスポーツ外傷やコンディショニングに関する調査を行った。アンケート調査項目の内容は現在の痛みの有無と部位、現在の治療の有無と部位、過去の外傷歴、怪我応急処置の有無、熱中症の症状の有無などである。今年は「スポーツ医療講座」を12回行い、男女合わせて722名の高校生が参加した。参加人数の中で多いスポーツクラブは、硬式野球部、次いで柔道部であった。今回は本学の「スポーツ医療講座」の取り組み内容とそこで得られた調査結果を紹介する。

今後の展望としては、南丹市との包括協定を結んだ点からも南丹市の中学生にもスポーツ医療講座を行い、地域貢献の場を増やしていきたいと考えている。

ミニデイサービスに参加する独居女性高齢者の 要介護リスクと主観的幸福感の関連 ～効果的な介護予防プログラムの作成を目指して～

○西川 秋子, 小石 真子, 上仲 久

明治国際医療大学看護学部

A地区ミニデイサービス「いきいきサロン」での効果的な健康教育を検討するため、参加者（独居女性高齢者19名、平均年齢86.6±5.0歳）の要介護リスクと主観的幸福感を調査し、統計的検討を行った。要介護リスク「運動機能」該当者は19名中9名（47.4%）であった。「抑うつ」該当者は19名中16名（84.6%）で、「抑うつ」と主観的幸福感合計の間に有意な相関がみられた。「抑うつ」と「運動機能」の間に有意な相関があり、「運動機能」低下が行動範囲を狭くし「抑うつ」傾向にいたらせる、あるいは「抑うつ」による不活発性が「運動機能」低下を招くと考えられる。

「運動機能」と「栄養」、「運動機能」と「口腔機能」の間にも有意な相関があり、「口腔機能」や「栄養」状態の悪化により、「運動機能」が低下していると考えられる。また、主観的幸福感の「孤独」と基本チェックリストの「運動機能」「栄養」「口腔機能」との間に有意な負の相関があり、身体機能の低下が高齢者を孤独傾向に向かわせると考えられる。今後のサロンでの健康教育は、栄養や口腔衛生への教育、口腔体操の実施等が必要である。さらに「孤独感」軽減を目的としたサロンでの参加者同士の交流促進や、主観的幸福感を高める機会の提供等が望まれる。